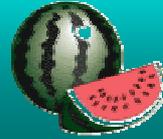




AUE Monthly



2010年 7月 1日

第 24 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500

目次

- 行事予定(7月)
- トピックス
- ・名誉教授称号授与式
- ・2010年度第1回環境ミーティング
- ・国際学生シンポジウム
- ・JICA産業技術教育研修開講式
- ・渡邊倫子文科省室長が講演
- ・日本学生陸上個人で本学学生4人が3位入賞の快挙
- ・食まるファイブ弁当の発売記念イベント
- ・「おさんぽ展」を学長、理事が視察
- ・救急蘇生法講習会
愛教人インタビュー
- ・形状記憶合金研究の北村准教授
お知らせ・報告・投稿
- ・本学が「刈谷の風景」で紹介
- ・鷹巣准教授が閻魔姿で熱弁
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

行事予定(7月)

- 6日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 7日(水) キャンパスミーティング(全学会議)(13:30~ 第二共通棟 431)
教務企画委員会(全学会議終了後 第二会議室)
学生支援委員会(全学会議終了後 第五会議室)
- 9日(水) 附属学校運営委員会(10:00~ 第三会議室)
- 13日(火) 役員会(13:30~ 学長室)
- 14日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 20日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 21日(水) 教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
- 26日(月) 役員会(13:30~ 学長室)
- 28日(水) キャンパスクリーンデー2010(13:00~14:30)
臨時教授会(15:00~ 第一会議室)

トピックス

名誉教授称号授与式(6/1)



本学の名誉教授称号授与式が6月1日(火)午前、第五会議室で行われた。対象者は野村和雄氏はじめ12人。式にはうち6人と松田正久学長、理事、学系長らが出席。学長が一人ひとりに称号記を授与した。この後、学長が「62回目の開学記念日を迎えました。記念の日に授与できるのはおめでたい

ことであり、皆様がなされた教育・研究・社会貢献・管理運営のご実績に対し、深く敬意を表します。作家の城山三郎さんは“静かに行くものは健やかに行く 健やかに行くもの遠くまで行く”を座右の銘にしていたと言います。先生方もこうした気持ちでご活躍されること祈念しています」とあいさつした。

野村名誉教授が代表してお礼を述べて、式を終了、講堂前で記念写真を撮影するなどした。

2010 年度第 1 回環境ミーティング (6/4)

本年度第 1 回環境ミーティングが 6 月 4 日 (金) 昼、第一共通棟自習室で開催され、学生、教職員 14 人が参加して本学の環境について話し合った。

保健環境センター長の菅沼教生教授があいさつ、参加者の自己紹介に続いて榊原洋子講師がミーティング内容を説明した。

2009 年度の環境報告書ダイジェスト版に「本学が省エネ日本一」と記載されたことが報告されたが、2010 年度のエネルギー使用量は増加傾向にあるため対策が必要であると意見が出された。

また、生協組合員の学生から「弁当容器回収ボックスの設置案」が出された。これは、生協で売り出される弁当容器をリサイクルする試みで、ごみ総量の減少を目指すもの。ドイツの「デポジット制」を例に、弁当容器にデポジットを利用できないものかについても検討された。

昨年度の「クリーン作戦」の結果では、ごみ量は減っておらず、昨年度はごみ処理に 600 万円ほどかかったことなどが報告された。来年度以降は、この活動の結果報告を作製するなどして、活動を周知させることで全体的なモラル向上を図る改善案が出された。

2009 年度環境リサイクル市の報告では、参加人数はラグビー部 14 人、生協学生委員 3 人だった。出展総数 230 余で、うち 111 点を販売し、売上金 5000 円は例年通り環境活動に利用。問題点としては収集方法及び開催日が挙げられ、合格発表日と同じ日だったため本活動に目が向かないとの意見があった。次回に向けて開催日等の変更を検討することとした。



国際学生シンポジウム (6/4)



「日本、香港、ドイツの教育と国民のアイデンティティー」をテーマにした国際学生シンポジウムが 6 月 4 日 (金) 午後 4 時半から第二共通棟 412 教室で行われた。英会話を楽しむキャンパス・イマージョンルームの一環として開催されたもので学生、大学院生、香港教育学院の学生ら約 50 人が出席し、発表中の様子やスライドを写真撮影したり、メモをとるなど熱心に聞いていた。

まず、中野真志教授が「異文化理解には何が大切か」のテーマで、映像を交えながら 2 人の教授 (Elliot と Banks) について「互いの違いを認めたり、気づいたり、理解することが大事」「異文化理解を通して自分を理解する」とそれぞれの考えを紹介した。続いて「日本の教育制度」と「教育とナショナリズム」についての発表があり、香港の学生は「香港におけるナショナル・アイデンティティーと教育」という題で話した。香港返還の歴史に触れて、法律上は中国人であるものの、香港に住んでいる人には「自分は中国人ではない」と感じる人が多いなど複雑な感情を紹介し、香港政府がアイデンティティーを非常に重要視していることを強調した。最後にドイツの学生がドイツの文化や行事を豊富な写真で示し、ドイツの旗の意味や地理・人口などのデータや第二次世界対戦後の分断の歴史や統合された今なお存在する東西格差にも触れた。ドイツの教育制度では、州によって制度が多少異なり、11 歳で学力によって進学先がほぼ決定さ

れることなど、日本との大きな違いに驚く参加者もいた。

JICA産業技術教育研修開講式(6/8)

本学が国際協力機構（JICA）と連携して実施する集団研修「産業技術教育」コースの開講式が、6月8日（火）に本部第三会議室で行われた。

この研修は、1999年度から実施されており、本年度が12年目。参加者は、ボツワナ、ミャンマー、スリランカ、パレスチナ、セントクリストファー・ネイビス、セントルシア、トルコ、南アフリカからの8か国9人（うち女性は1人）で、それぞれの母国では政府高官、大学等の教員、職業教育の指導員などを務める産業技術教育の専門家ばかり。

開講式では、松田正久学長が「心からの歓迎の意を表します。専門の講義だけでなく、広島、奈良、東京での研修旅行でも知見を広められ、皆様の国で各専門分野において一層の活躍を期待しております」と歓迎のあいさつ。研修員からは、それぞれ名前、職務などについて自己紹介が行われたが、中には覚えてたの日本語であいさつする人もいて、出席者が微笑む場面も。



今回の研修で研修員は、7月16日（金）の最終日まで、JICA中部国際センターと大学会議室で日本の学校教育や技術教育における教員養成などの講義を受けるとともに、実際の産業技術教育に関わる中学校、工業高校、高専を視察、豊田自動織機、トヨタ自動車、デンソーなどの企業を訪問して研修する計画。また、広島、奈良県、東京都での研修では、日本の歴史・文化や伝統技術に親しみ、教育や科学技術に関わる企業や施設を訪問して受講。

6月25日（金）には、松田学長による「日本の教育大学」と題した特別講演が国際交流センター会議室で行われ、各研修員は熱心にメモを取り、質問をするなど真剣な表情で聞いていた。講演終了後には、学長室において研修員と本学役員との昼食会が行われ、歓談しながら慣れない日本式ランチを楽しんでいた。

渡邊倫子文科省室長が講演(6/9)

文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室の渡邊倫子室長が6月9日（水）、本学第二共通棟431教室で「教員養成の課題」をテーマに講演した。文部科学相が教員の資質向上策



を中央教育審議会に諮問した直後で、菅新政権の発足もあって教員養成6年制を含む制度改革への関心が高まる中、タイムリーな講演会となった。関心の高さを反映して学生、教職員ら約200人が参加し、階段教室はほぼ満席となり、講演資料が足りなくなり増



刷する一幕も。午後4時に開会。松田正久学長が渡邊室長の略歴を紹介し、講演に移った。

渡邊室長はパワーポイントの資料を使い、国立教員養成系大学・学部出身者の公立学校教員採用者に占めるシェアが年々低下している現状などをわかりやすく解説。また、小中学校での不登校児童生徒の割合、学校内の暴力行為の件数が増加している学校現場が抱える課題や生徒指導時間、事務的業務、補習の時間が増え、自主研修時間が減少した教員勤務実態調査結果、公立小中学校教員の約34%（18万8000人余）は50代以上で経験の浅い教員が大量に誕生していること、東京都教師養成塾の動きなどを丁寧に説明した。

その上で、教員養成課程の教職実践演習必修化など最近の改革や教職大学院の課題などに触れ、室長は「教員の質の充実のためには多様化した課題への対応、地域・保護者との連携、指導力・コミュニケーション力の強化が必要。新たな教員免許は4年プラスアルファで、学ぶ中身を増やすことを検討していく。現場での研修は大きな議論になると思う。動きを見てほしい」と述べた。質疑応答もあり、学生の質問に室長が「理論と実践を通して学び、力のある教員になってほしい」と激励する場面もあった。参加者は真剣な表情で聴き入り「教員養成制度の課題、現状がよくわかった」「おもしろかった」などの感想を口にしていた。約1時間半の講演の最後には大きな拍手が送られた。

室長は講演に先立ち、岡崎市の附属特別支援学校、附属岡崎小学校で教育実習を視察。講演では「子どもが子ども教えているようでドキドキした」と会場を沸かせた。また、本学の6年一貫コースのミーティングに参加。学生の発表を聞いた後、交流した。室長は学生にコースを選んだ理由、授業実践の経験の有無、教員養成6年制への意見などを聞いた。学生は「さまざまな経験がしたくてコースを選んだ」「4年からボランティアを行い、授業で発表する実践的学習ができた」「（一律）6年制になると学生は学ばされているとの（受動的な）意識を持ってしまわないか」などと答えていた。



日本学生陸上個人で本学学生4人が3位入賞の快挙(6/18~6/20)



6月18日（金）20日（日）に神奈川県平塚市の平塚運動公園陸上競技場で行われた「2010 日本学生陸上競技個人選手権大会」で本学学生4人がいずれも3位に入賞し、表彰台上った。男子400Hの西淳史さん（大学院2年）、女子3000障害の花岡沙耶さん（2年）、女子走り高跳びの堂ノ下藍さん（1年）、女子棒高跳びの渡邊みなみさん（大学院1年）で、うれしいニュースは本学陸上競技部部長の筒井清次郎教授から届いた。4人が揃って3位に入賞したのは本学初の快挙という。室内で表彰式が行われたため写真撮影を逃した渡邊さん以外の3人の表彰台上の晴れやかな表情が印象的。



また、男子400mの中野弘幸さん（4年）は今後の活躍が期待されるため、日本学生陸上競技連盟のヨーロッパ遠征に帯同することになった。経費は東海学生陸上競技連盟の負担という。

食まるファイブ弁当の発売記念イベント(6/19)

本学西村敬子教授（家政教育講座）の研究室で企画を進めてきた「しょくまる5バランスベ

んとう」と「しょくまる5おにぎりセット」の発売記念イベントが6月19日(土)、ジャスコ岡崎南店で行われた。6月は食育月間、19日は食育の日。弁当は東海地区のジャスコで6月16日(水)から、ミニストップでは6月22日(火)から期間限定で好評発売中。同イベントに参加した本学大学院修了生で愛知学泉大学非常勤講師の丸山浩徳さんに感想文を寄せてもらった。



お弁当の完成までには関係企業を含めて多くの方々のお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。何回も試作、試食を重ねて満足できる味になったと研究室一同自負しております。この「しょくまる5バランスべんとう」にはたくさんの野菜が入っており、カロリーも低く抑えられています。健康志向の方だけでなく、メタボ気味のお父さんや普段バランスを気にしない若者、野菜嫌いの子もたちに食べてほしいという願いが込められています。この思いを多くの人に発信しようと、イベントに参加したこ

の日、ジャスコの各レジや壁には食まるファイブと食事バランスガイドのポスターが貼られ、会場には食まるファイブの絵本や手袋などオリジナルグッズが展示されました。

イベントでは、食まるファイブの劇を、今回のお弁当作りに協力してくれた刈谷市立日高小学校の児童たちが演じました。子どもたちの健康を脅かしているメタボ大魔王とメタボ4将軍を食まるファイブがやっつけるというお話です。何度も練習を重ねた劇は、動き方やセリフ回しなど素晴らしく、とても楽しいものでした。



次に食まるファイブの歌を三線で演奏してくれたのは本学三線サークル「てんつく」の2人です。独特の音色に児童の歌声がのり、普段と違う食まるファイブの歌に安らぎを感じました。しょくまるを描いてくださった「つかもとあきこ」さんのサイン会では、子どもたちが「食まるファイブ」のポストカードに好きなキャラクターの絵を描いてもらっていました。開始と同時に子どもたちが一斉に列を作ったのがとても印象的で、サイン会はイベント終了後も続いていました。

お弁当の販売が始まると、一番に並んだ年配の男性が「新聞でしょくまる弁当のことを見て買おうと思った」と弁当3個とおにぎりセット2個を買っていただきました。他にも「今日の家のご飯はみんなこの弁当にする」、「お弁当もおいしそうだし、キャラクターがかわいい」など嬉しい声をたくさん聞くことができました。また、「ナスのピザ焼き」と「鶏の照り焼き」を試食した子どもたちは笑顔で「おいしい」。イベントは大成功に終わりました。今までの苦労が報われた瞬間でした。特にお弁当をおいしいと喜んでくれた子どもたちの姿は忘れられません。この子どもたちが普段の食生活で少しでも野菜を食べようという気持ちを持ってくれたら嬉しく思います。

後日ジャスコの方が、「このお弁当は仕入れてもすぐなくなってしまう」と言っていました。今後も「食まるファイブ」を広くアピールし、より多くの方にバランスのよい食生活を目指していただきたいと思います。

「おさんぽ展」を学長、理事が視察(6/24)



松田正久学長と村松常司理事は6月25日(金)、本学学生による知立市の商店街を会場にした美術作品展「おさんぽ展」を視察した。同展は6月15日(火) 27日(日)、知立市の旧東海道にある商店街で開催。作品を制作したのは宇納一公教授(美術教育講座)の学生

24人。自ら商店主らと交渉して計11店から展示スペースを借り、絵画、彫刻、金工、オブジェなどの作品を置いた学生主導のユニークな展示会。知立市文化会館パティオ池鯉鮒で同期間に開催中の野外彫刻プロムナード展10周年記念事業「ten stages」の併催企画。

商店街の道路には作品展の看板が立てられ、展示にも工夫が凝らされていた。学長らはこの日、「おさんば展」の看板が出た店を1店ずつ回り、作品を丁寧に見て回った。学生が店の雰囲気に合わせて作った作品も多く、ある店主は「うちにぴったりで、とてもよくできている。展示期間終了後もずっとここに置いてほしいくらいです」を気に入った様子だった。学長、理事はこの後、パティオ池鯉鮒へ足を運び、宇納教授から説明を受けながら本学卒業生が制作した彫刻、工芸作品などのレベルの高い作品群を視察。材質や技法などを聞き、感心しながらいろいろな角度から眺めていた。



蘇生法講習会(6/30)



本学の教職員、学生を対象にした本年度第一回の救急蘇生法講習会が6月30日(水)、第一会議室で開催された。毎年実施しているが、今回は3時間の講習会終了時には修了証が渡された。修了証発行は4年前に次いで2回目。この日は教職員、学生計17人が参加。刈谷市消防署の救急救命士3人がビデオの上映を挟んで3体の人形を使って人工呼吸法を指導。参加者は熱心に救急救命士の話を聞き、実際に人形の胸を押さえるなどして人工呼吸法を習得していた。

AED(自動体外式除細動器)が公共施設に普及し始めて5年が経過。本名にもAEDが6カ所に設置されており、体験講習を通して誰もが自信を持って慌てずに人命救助ができるのが望ましい。担当者は「教職員、学生が今後も講習会に積極的に参加してほしい」としている。

愛教人インタビュー

形状記憶合金研究の北村准教授

形状記憶合金の研究、開発を進めている本学の北村一浩准教授(技術教育講座)と吉見製作所(大府市北崎町、吉見幸春社長)がこのほど、東海ケーブルチャンネルの番組「東海リポート スゴまち20」で紹介された。東海地区のケーブルテレビがそれぞれの番組を持ち寄り、街自慢をする番組で、東海4県26局のケーブルテレビで6月に放送された。北村准教授に研究の成果、今後について聞いた。

番組はどんな内容でしたか。

「脳ペラの研究、製造などについて取材を受けました。このペラは脳外科手術に使う器具で、脳みそを傷つけず、手術の邪魔にならないよう曲げて支えておくためのものです。従来のステンレス製は使った後、叩いて伸ばすため何回も使えませんでした。私たちが開発したのはチタンとニッケルの合金で、形状を記憶しているため、120度に熱すると、消毒ができる上、形も元の板に戻り、安全に100回以上使えます。材料で協力し



「いただいている吉見製作所では私の合金に関する説明や製造の場面などが撮影されました」
形状記憶脳ペラは珍しい？

「脳ペラは 2008 年ごろ、世界で初めて完成させました。既に販売中のものもありますが、改良型はドクターに試用をお願いしている段階です。形状記憶合金による脳ペラのような使い方は世界に例がないと、学会などでは大きな反響がありました」

形状記憶合金のこれまでの研究や商品化されたものは。

「ブドウ作業補助具、グレーパー（グレーヘルパーの略）は昨年 10 月に完成しました。腰にベルトを巻き、そこから上に伸びた合金で腕を支えるもので、一日中腕を上に入れてのブドウの収穫作業が楽になります。肩こりも解消、品切れ状態の人気商品に。この応用を 5 月にアメリカ・カリフォルニア州で開催された形状記憶合金と超弾性合金の国際会議で発表し、大変注目されました。4 年前に開発した“らくらくエプロン”も注目されています。エプロンに取り付けられた合金の超弾性で、腰を曲げた作業も楽々。10 ㎏の物を持ち上げる時にかかる負荷は 4 ㎏程度で 6 ㎏のアシストが可能です」

共同開発してきた吉見製作所と社長について。

「吉見製作所は形状記憶合金のベンチャー企業で、大学の研究室以外では、日本には 2 社ぐらいしかありません。社長の吉見さんとは 10 年ほど前に知り合い、意気投合しました。吉見さんは気さくで親切でアイデアマン。型くずれしないランドセルに使えないかなど形状記憶合金の応用を常に考えている人ですね」

形状記憶合金の可能性、今後の抱負を。

「5 月の国際会議でカリフォルニア大学のバイオメカニクス（生体力学）の教授からは合金をリハビリに使えないかと興味を持ってもらいました。合金は手、足、首、など人体のあらゆる部分の補助用具に利用できます。可能性は大きいですね。今後は、特にヒザで悩んでいる人のために負担を軽くする用具を開発したいと考えているところです」

お知らせ・投稿・報告

本学が「刈谷の風景」で紹介



刈谷市民向け情報誌「かりや 市民だより」6 月 1 日号に本学が取り上げられた。20 ページの同号の背表紙カラーの「かりやの風景」欄で、シリーズ 100 の節目での掲載となった。愛知教育大学の名と大学誘致前と開校間もない本学の 2 枚の空撮写真が掲載された。同市井ヶ谷町周辺の原野に近代的な講義棟や整然とした道路ができた様子が一目瞭然。説明では「昭和 43 年 3 月 14 日に起工式が行われ、約 51 万平方メートルの土地に総工費約 42 億円で完成しました」「今年 3 月には市と生涯学習やまちづくりなどの分野で相互に連携する包括協定を結び、幅広い交流と協力をめざしています」などと書かれている。温故知新を感じさせる企画で、本学と同市のさらなる連携が期待されている。

鷹巣准教授が閻魔姿で熱弁

前号（第 23 号）の愛教人インタビューで紹介した鷹巣純准教授が閻魔大王姿で熱弁を振るったシンポジウムの様子が報告された。6 月 19 日（土）に名古屋市千種区の浄願寺で行われた「映像と音で探る東西の地獄絵の旅 神曲と六道絵」で、約 80 人が詰め掛ける盛況ぶりだったという。鷹巣准教授は「日本の中世における



地獄絵」をテーマに講演。愛知県立芸術大学の水野留規氏が「ダンテの神曲における煉獄・地獄」について演奏付きで話し、休憩。鷹巣、水野氏に愛知県立大学の中根千絵氏も加わり「東西の地獄を比較する試みについて」をテーマに意見を交わした。



鷹巣准教授によると、閻魔のメイクは4人がかりで1時間かかり、「僕が出たらどよめきが起こりました。最初は戸惑ったようですが、結果的には喜んでくれ、閻魔王になりきって正解でした」という。司会を務めた中根氏は平安時代の学者、歌人の小野篁に扮して登場、ツーショットも不思議な雰囲気漂っており、閉会後は出演者と記念写真を撮っていた。youtubeでその様子的一端を見ることができる。

<http://www.youtube.com/watch?v=cNRc4LVS3fw>

<http://www.youtube.com/watch?v=rbPPm9LaacE>

また、同月26日(土)、名古屋市中区大須で行われたトークショー「仏教美術アウトサイドVSコンクリート仏像も行列ができたため臨時席を増設して60人を収容、開始時間を30分早める盛況ぶりだったとか。鷹巣准教授がやはり閻魔王に扮装して登場、約40分話し、続いてコンクリート(仏像)造形作家を研究している大竹敏之さんのスライドショーが行われ、地獄絵と仏像のどちらが気に入ったかを挙手で聞いたところ、地獄絵の「圧勝」だったという。

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿)

夏至を迎え、フィンランドは名実ともに夏本番となりました。ヘルシンキでも夏至をピークに太陽はほとんど沈まなくなり、時間の感覚が全く狂ってしまいます。ここ数日は多忙で徹夜することが続いていましたが、外が明るいままのため、時計の針だけが進んでいるような妙な錯覚を覚えます。先週末の夏至祭には人々は森に出掛けたり、家族や友人と過ごしたりと思いいの一日を過ごしたようですが、そのためか市内からはほとんど人が消え、クリスマス以来の「ゴーストタウン」となりました。夏至祭が終わると多くの人たちは1か月以上の長い休暇を取ります。

私が関わっている企業も既に工場の火を止め、8月上旬まで休みとなっています。日本でこれだけの長期休暇を取ることは考えられませんから、羨ましい反面、それで大丈夫なのだろうか？という余計な心配をしてしまいます。

さて、本日は二つの展覧会について簡単にご報告したいと思います。まずは5月から6月に掛けて開催されたアアルト大学大学院の修了制作展「MOA」。これまでは学内で開催されてきたようですが、今年アアルト大学へと変化を遂げたことを期に、市内中心部、大聖堂の目の前という好立地に会場を移して開催されました。出品は義務ではなく自由参加のようですが、デザイン領域に力を入れている当大学だけあって、出品者のほとんどはデザインの学生であったと思います。



ただしその幅は大変広く、テキスタイルやファッションから都市計画に至るまで実に多様です。中にはこれをデザインと受け止めて良いのだろうか、というようなアート寄りの作品も目立ちます。また日本の大学ではグラフィックデザインも当然デザイン領域の一部を担っていますが、ここではデザインではなくメディア領域の中に組み込まれているのも特徴といえます。全体の印象からは最先端の研究をするというよりも、既存の枠組みの中で日常に即したデザインの提案をしているものが多く、これもまたフィンランドらしさを感じました。

次はデザインミュージアムで開催中のオイヴァ・トイッカ展です。オイヴァ・トイッカはその代名詞が「バードシリーズ」と言っても良い程、イッタラ社によるガラスの鳥が大変有名です。



日本でも多くのコレクターがいますが、ここフィンランドでもとても人気があります。そのオイヴァ・トイッカによる大展示会が現在開催中、初日オープニングはオイヴァ自身の誕生日であったことも手伝い、雨だったにも関わらず行列ができる程の人気ぶりでした。勿論ガラス作品が多いのは言うまでもありませんが、それだけではなく、例えばコスチュームのデザインなど実に多様なデザインをしていることに驚きました。デザインミュージアムではこれまでも多くの企画展が開催されて来ましたが、私が観て来た限りではこのオイヴァ・トイッカ展が一番魅力的な展示会であったように思いました。既に私は3回観に行きました。これから観光シーズンに入りますが、もしもフィンランドに旅行を計画されている方がいらっしゃいましたら、是非デザインミュージアムにも足をお運びください。

(井戸 真伸)

編集後記

サッカーワールドカップの新聞記事で「チームフロー」なる言葉を初めて知りました。いわゆる「流れ」ですが、スポーツでは各選手が自信に溢れて精神を集中させると、自然に体が動いて最高の実力を発揮できるといい、「集団でもゾーンに入る状態があり、チームが一つの生き物のように動く」様子をこう表現するそうです。南アフリカ大会で健闘した日本代表や番狂わせの勝者となったチームの活躍はフロックならぬフローが生んだ“奇跡”といえるかもしれません。陸上競技部の本学学生の活躍は、たまたま個人での入賞でしたが、4人同時というところに本学学生の勢い、いい流れを感じました。団体競技はもちろんですが、本学のさまざまな分野でのチームフローへの期待が膨らみます。

なお、広報専用のメールアドレスが下記のとおり新設されました。情報は今後、こちらにお寄せください。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール: kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者: 総務担当理事 折出 健二